

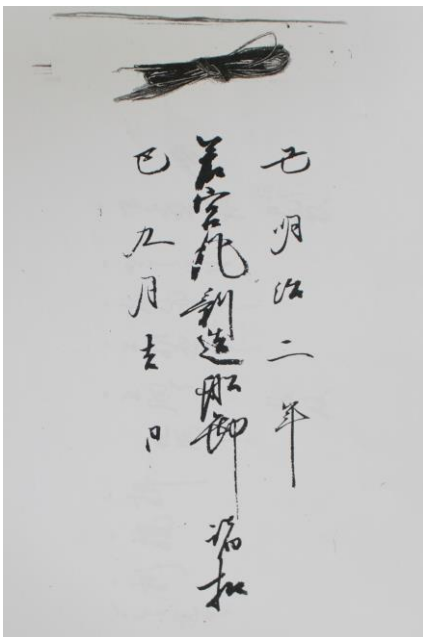
余子浜船渡八幡神社（若宮さん）の北側に江戸時代蔵元として、活躍した加藤家に「明治二年 若宮丸新造船卸諸控」と記された資料が残されている。

明治元年（1868）9月に明治と改元され翌2年9月に船卸（進水）した船は130石船とだけ書かれている。石数から推測すると約320俵積で、乗組人数は船頭・水主共に3~4人程の内航帆船だと思われる。『網干町史』には、「網干に於て、自己の独立倉庫を有しない藩主又は代官は、その年貢の取扱いを蔵元に委託していた。」と記され、池田屋弥一兵衛と成田屋宗十郎を挙げている。成田屋宗十郎とは此の「若宮丸新造船卸諸控」を記した加藤高文の父である。蔵元とは「倉庫業と貨物運搬の仲次を兼ねたようなものである。」とも書かれている。

この資料には船中22名が祝いの席に御膳付で呼ばれ、彼らも「到来物」として銀札を送っている。この船中とは成田屋のお抱えか馴染みの水主達だろうか、それとも蔵元業としての倉庫業・運搬のための従事者であろう。

新造船「若宮丸」は新しい時代を迎え、経済の中心大坂と網干間の貨物運搬のための船と考えられる。蔵元の加藤高文が氏子として地元余子浜の発展と、新造船の航海の安全・守護として「若宮丸」と命名した意気込みを感じられる資料である。

網干歴史講座会員 新在家 森山式子



千灯祭の準備が整った船渡八幡神社